（三）

私は天寺のさんたちのことを書くときに、書房と書房のことを書き落としてはならない。書房といふのはさんではない。境内のをしたり家を持つたさんたちの使につたりする、四十内の男で、人間な地からいへば、この寺で一番びりつこである。ところがこの人はどうしてもの人間とはへない。朝から晩迄實によくいてゐる。私はこの寺に五十日もつてゐたのだが、いまだ曾てこの書房がどつかでいてゐないところを見たことがない。いはゆる々とく方で、にひ付けられるのでもなければ、自分のきをかに告するのでもない。何時までも何時までも掃いたり、土を掘りかへしたりしてゐる。

「書房、御さん」

私が通りがかりにをいはふものなら、は、はにかむやうに一寸つて合をする。

「あなた、おへるんですか」

と訊いて見たら、は、

「へへえ、おなんかりましねえ」

といふ。

「きながら、つていつも何をへてゐるの？」

「へへえ、何もへることなんかねえだよ」

それでもはいつ見てもばしさうににこついてゐる。生れ落ちてから、いまだて平といふものを見たことがないといふやうな付きだ。

「和さん。このお寺で眞先に成するのは書房でせう」

と私は、主人のさんにいつて見たが、は些か服さうであつた。もしあの景和にそんなことをいつたなら、

「さやうさやう、御も御尤も」

とげらげらつて定したであらうとはれる。しかし、この寺で書房をくつてゐるものは、一人もない。それだからといつて、してゐるものもないであらう。たゞ、に重な馬だにつてゐるのかも知れない。

書房はもしない、もへない。また自分でいつてゐるやうにへるものも持たない。たゞ々と朝から晩まで何か知らいてゐる。さんのおかみさんたちの洗物までも、まれさへすれば運んで呉れる。それだからといつて、彼はいてやつたいをめたことがない。

「書房。御お上がり」

とでもいはれゝば、

「へへえ、ありがたうございやす」

と土間であらうと、所であらうと、無雜作に踞んで[[1]](#footnote-1)平げてしまふ。べてしまふとまた行つてく。

　こそは、すべて做模打様をれて、濟の所謂無事是人の境

にゐるのかも知れない。

「、着裳」の境にゐるのかも知れない。少くともすべてのをれた人は書房のやうになるものゝやうな氣がする。（『京城日報』1940年5月19日）

1. 「踞」は「うずくまる」だが、ここでは「しゃがんで」と読む。 [↑](#footnote-ref-1)